いじめの未然防止のための手立てについて
－学級経営の視点を踏まえた特別の教科　道徳の実践を通して－

学籍番号　　209206
氏　　名　川島　有香
主指導教員　柿　慶子

1．研究の背景

小学校の教育現場において，いじめの認知件数は年々増加している。教師が介入してどのように指導していくかは大切なことであるが，子ども同士でトラブルやいじめについて日常的に考え，支え合えるような集団を育てることで，いじめ事象に至る前の未然防止や早期発見・対応が可能になるのではないかと考える。そこで，学級経営の視点から，いじめの未然防止について考えることとした。また深刻ないじめ問題を発端に，「特別の教科 道徳」が教科化され，その中ではいじめ事象について未然防止の観点が多く含まれている一方で，上手く機能していない課題が見える。以上のような問題意識を基に，本実践課題研究では，いじめの未然防止のための手立てとしての学級経営の視点を踏まえた「特別の教科 道徳」の授業の可能性を検討することを目的とする。

2．基本学校実習Ⅰ・Ⅱ及び発展課題実習Ⅰにおける実践

基本学校実習Ⅰでは，授業観察，学習支援や教職員と話し合いの中から，実習校における教育課題の把握を行った。実習校は，様々な援助ニーズのある子どもも多い中で，「学校での教育に差を作らない」という方針のもと，教職員が日常的に綿密に情報共有をし，指導・支援につなげている。また子どもたちには，「自身で考え，助け合いながら動く」ということを学年に応じて指導し，学年が上がるにつれてそれが積み上がっていっている。そのような中で，筆者は援助ニーズの高い子どもへの直接的な支援だけでなく，その周りで助けになろうと動いている子どもにも積極的に声掛けを行い，子ども同士をつなげるような支援をした。

3．実践研究Ⅰ：いじめに関する学級経営についてのインタビュー調査

教員のいじめの未然防止に向けた意識に関するインタビュー調査を行い，教員は普段どのような考えのもと，学級経営や子どもの指導を行っているかを分析した。担任教員２名のインタビューからは，【A 学級の子どもの実態把握】とそれに対する【B 担任の指導・支援】【C 事態の深刻化を防ぐ】【D 保護者との連携】【E その他】という大きな５つのカテゴリーが抽出された。また学年担当教員２名のインタビューからは，【F 子どもたちにチームで支援することについて】【G 子どもの気持ちや人権に配慮した関わり方】【H アセスメント】【I いじめの未然防止のための指導】という４つのカテゴリーが抽出された。実習校では，担任教員と学年担当教員が，お互いにそれぞれの立場を生かしながら，子どもへの指導・支援に

あたっていることが明らかになった。

4. 実践研究Ⅱ：Q-Uの実施と結果に関しての担任との協議

4 年生と 6 年生の子どもを対象に実施した Hyper-QU の結果をもとに，担任教員と協議を行った。どちらの担任教員も Q-U の結果は普段の様子とリンクしてると捉えており，改めて Q-U が学級の実態把握に有効であることが分かった。また，学年担当教員からは普段接する中で感じている子どもの様子と Q-U の結果を併せて見ることで，より子どもの実態把握に役立つという考えも得た。

5. 実践研究Ⅲ：特別の教科　道徳の授業の実施

教員へのインタビュー調査の結果分析等から得た知見を参考に，いじめの未然防止を目指した「特別の教科 道徳」の授業実践を行った。4 回の特別の教科 道徳の授業を考えるにあたって,「子どもたちが自分事として考えること」「具体的に様々な立場に立って考えること」「学級の中で色々な子どもの考えに触れること」の主に 3 つの観点を大切にした。

授業を終えて子どものワークシートを分析してみると，授業のねらいに充分に迫ることができているとは言えなかった。普段の学級の様子や子どもの実態把握なしには，いじめの未然防止を意識した道徳の授業は組み立てることは難しい。その点では，子どもの実態把握が不十分だったと言わざるを得ない。

道徳の授業やいじめについて考える日などの取組の機会だけでいじめの未然防止を意識するのではなく，日常の学校生活での指導・支援が道徳の授業で考える際の基になる。授業展開やそれを支える発問は，普段の子どもの実態に応じたものでないと子どもに届かない。そのため，安心して学べる学級環境や普段からの担任や教員によるぶれない指導・支援が大切であることが改めて分かった。

6. 総合考察

本実践課題研究は，いじめの未然防止のための手立てとしての学級経営の視点を踏まえた「特別の教科 道徳」の授業の有効性を検討することが目的であった。いじめは表面からは見えにくく，教員の介入が難しい場合も多い。そこで大切になるのは，子ども同士でトラブルやいじめについて日常的に考えることである。今回日常的に子どもたちが出会うであろう内容を授業の中で子どもたちと一緒に考えた。日常的に，お互いがお互いの違いに気づき，支え合うような集団を育てることで，いじめ事象に至る前に未然防止や早期発見・対応が可能になるのではないかと考えたからである。しかし一番難しかったのは，いじめの未然防止のためには「自分事として考える」道徳が必要であるが，そのような授業の展開をどのようにしていくかである。子どもの実態把握を授業における子ども同士の意見や考えをつなげる展開に生かすことによって,「自分事として考え」させる授業を行うことができると分かった。今回，学級経営における「いじめの未然防止」とその延長上にある「特別の教科 道徳」の授業の必要性を再確認することができた。